『枕草子』日記章段の考察

「殿などのおはしまさでのち」の段の解釈をめぐって

遠田晤良

一　はじめに

定子賛仰を主題とする日記章段の執筆姿勢が、前期章段と後期章段との間に微妙な転換があることはつとに指摘されている。「殿などのおはしまさでのち」の段は、長徳の政変直後に材を採る数少ない章段であるが、「再出仕を契機として定子と清少納言が新しい関係を結び直す屈折点であると同時に、作品としての枕草子と読者との関係が新しく結び直されてくる曲り角でもあったのである」[1]とも言われる微妙な転換を示す章段である。

中関白家を見舞った危機のなかでもなお変わることない主従の絆の強さを描くこの段の主題が、定子の寛容と機知を語りながら定子賛仰に収斂してゆくものであることは疑いない。しかし、定子賛仰の主題は必ずしも徹底せず、きわめてまとまりの悪い印象が強い。

その印象の不鮮明さは、山吹の花びらに託された中宮の心情や、謎合わせのエピソードを語る中宮の真意が必ずしも明確でないことによるところが大きい。特に謎合わせの段は一見蛇足のごとく、全体の印象を不鮮明なものにしている。こうした不鮮明さは、定子主従を見舞った動揺と分裂という深刻な現実を、あからさまに記すことを潔しとしない清少納言の姿勢に原因があると考えられる。

本稿は、山吹の花びらが物語る意味と「謎合わせ」のエピソードを語る中宮の真意を再考することによって、日記章段における中宮賛美の構図の一端を明らかにしたいと意図するものである。

二　長期の里居

この段の回想は、

殿などのおはしまさでのち、世中にこと出でき、さわがしうなりて、宮もまゐらせ給はず、小二条殿といふ所におはしますに、なにともなく、うたてありしかば、ひさしう里にゐたり。[2]

と関白道隆薨去の翌年に起こった長徳の変[3]を背景に、その頃の清少納言自身の里居を語ることからはじまる。「世中にこと出でき、さわがしうなりて」というのが、花山院誤射事件に端を発し、私に大元帥法を修した罪、東三条院詮子を呪詛した罪によって、内大臣伊周をはじめ隆家・信順・道順が左遷された、長徳二年四月二十四日の政変とそれに続く日々をさすものである。

その頃清少納言が「ひさしう里にゐたり」という理由は、「御前わたりのおぼつかなきにこそ、猶えたえ（へ）てあるまじかりける」と言うように、中宮のお側で立ち働く自信がなかったという挫折感にあるという。

その原因は、

さぶらふ人たちなどの、「左の大殿（道長）方の人、知るすじにてあり」とて、さしつどひ物などいふも、下よりまゐる見ては、ふといひやみ、放ちいでたる（のけ者にする）けしきなるが、見ならはずにくければ、

と語るように、清少納言を道長方に内通する者であるとして疎外し、あらぬ陰口を囁く同僚女房たちへの怒りにあった。そのため「『まゐれ』などたびたびある仰せごとをも過ぐして」長期の里居を続けたのであった。道長方に内通する者という中傷に対する無言の抵抗ともいうべき里居であった。清少納言の忿懣が想像されるとともに、事件直後の定子方女房たちを見舞った動揺と分裂のさまが痛ましく見え隠れする。

こうした気持ちを抱いての清少納言の里居が、長徳二年の出来事であり、かなり長期にわたったものであることは疑いのないことであるが、いつからいつまでのこととその期間を明らかにすることは難しい。

「宮もまゐらせたまはず、小二条殿といふ所におはしますに」とあるのは、中宮が叔父高階明順の「小二条殿」に滞在したことをいうと考えられる。三巻本勘物によれば、長徳二年三月四日、中宮は職御曹子から二条北宮に出御されたが、この二条の宮は、長徳二年六月八日火災により焼亡したという。そのため中宮は二条にあった叔父高階明順宅へ移られた。諸注「小二条殿」がこの高階明順の宅をさすものと考えている。[4]

清少納言にたいする朋輩の中傷は、関白職を巡る道長と伊周との軋轢の間に表面化したものであろうから、長徳二年の四月前後からいっそう厳しいものになったであろう。誹謗中傷に嫌気がさして里居するのは、火災による中宮の転居をきっかけにしたものであったとも考えられる。しかし、その里居は「ひさしう里にゐたり」と自ら言い、使の長女にも「たれも、あやしき御ながゐ、とこそ侍るめれ」と言われるほど異常に長いものであった。

仮に長徳二年六月九日以降のことと考えられるとして、はたしていつ頃まで無言の抵抗を試みていたものであろうか。

その時期を推定する手掛かりは、本文の記事によって、

（1）中宮の小二条殿滞在中、（2）草が茂り、露の置く季節、（3）牡丹の季節、（4）朽葉の唐衣、紫苑、萩など女房の服装、（5）山吹のはなびら、などが内部徴象として存在するが、「山吹」「牡丹」などの春の景物と「朽葉の唐衣」「薄色の裳」「紫苑」「萩」などの秋の衣装が、相互に矛盾しその時期を決定できない。その矛盾が清少納言自身の記憶の混乱によるものであるとすれば、その混乱を解きほぐす合理的な解釈がないかぎりこの段の内部に決め手はない。

萩谷朴氏はこの段と八十段「里にまかでたるに」の在り所を隠した里居、二百五十八段「御前にて人々とも」の段の高麗縁の畳みを賜る里居がこの時期に重なるものとして、清少納言の里居が「恐らく、六月八日の二条北宮焼亡以後、六・七・閏七・八・九月として足かけ五カ月も里居したと思われる」

と推定されている。

長期の里居の後、再び出仕した清少納言を「あれは、いままゐりか」と新参扱いした中宮の軽口も、いかにも長期にわたる里居の後の出仕であったことを窺わせるのであり、「足かけ五カ月」というのは長期間というに十分すぎるであろう。

在りし宮仕えの体験を素材とした章段を日記章段あるいは日記的章段と規定したときから、われわれは、清少納言が現実にあった事実をありのままに記述したものであると受け止めがちである。史実と齟齬が有れば記憶の誤りや錯誤として合理的な解釈が求められて来た。しかし、日記章段の史実あるいは事実と相違する記述が必ずしも誤りというべきものではなく作者の作為や創作意図によると見るべきものであることが次第に解明されつつある。さらには「随想」という枠にとらわれず、清少納言の創作にかかる「説話」と見る意見もある。(6)

仮に「身の上をのみする」日記作品であっても、作品の中の事実は作者の体験に基づく現実の再構成であり、意識的無意識的に虚構が入り込む余地があることは自然である。実体験と再構成された事実との乖離に、むしろより深い意味を読み取り得るものである。枕草子の日記章段は「身の上をのみする」日記ではもとよりなく、「目に見え、心に思ふ事」を記したものであってみれば、事実の忠実な再現という縄縛から極めて自由な、主題性を優先させた作品であると考えられる。

現実の里居の期間がいつからいつまでのことと確定できなくとも、この時期は中宮がうち続く中関白家の悲運のために、最も心痛多い日々を過ごされていた時期であることは紛れることない事実である。いかに陰険な中傷に憤ったとしても、中宮鍾愛の女房を自認する清少納言の里居としては尋常ではない。こうした悲運の時期こそ清少納言のような女房が必要とされ、変わらぬ忠義の心が求められたはずである。

先述のごとく里居の理由は、同僚女房の陰口に嫌気がさしてということである。この陰口が中宮の寵愛をもっぱらにしている清少納言の日ごろの言動に対する嫉視の裏返しであったであろうことは容易に推察される。先途の暗い影におびえる不安と動揺が生み出したスケープゴートであったろうが、清少納言の姿を見れば口をつぐむ女房たちの陰湿な行為に対しては、勝ち気な清少納言だけに無力感を禁じ得ず、逃げ出すしかなかったのであろう。

しかし、濡衣を着たまま里に逃げ出すことは噂を事実と認めたことになりかねない。強情を張って里居を続けることが「宮の辺には、ただあなた方にいひなして、そら言なども出で来べし」と事態が余計悪化するであろうことも承知しているのである。陰口に対する清少納言の態度はなげやりである。はたして陰口には根拠があってのものだったのだろうか。

清少納言を取り巻く客観的状況は、その陰口が全く根拠のないものと断言できないことを示すものが多い。そのひとつが道長所縁の人物や、「あなたがた」であることが明らかな男性官人との日ごろの親交である。

たとえば、事件の後は殿上人が里邸に訪ねて来ることさえ、噂をさらに悪化させることであったから、「此度、いづくとなべてには知らせず」、清少納言の居所を知っている者は、わずかに前夫則光とその他には、「左中将経房の君、済政の君などばかりぞ知り給へる。」（八十段）という状態であったと言う。

前夫である則光が居所を知るということは頷けるとしても、左中将経房はいうまでもなく道長方の人である。枕草子を世に出すきっかけを作った人物として跋文に記され、枕草子本文に繁く登場する、清少納言とは親交厚い男性の一人であるが、道長の従兄弟にあたる。安和の変で大宰府に左遷配流と

なった西宮左大臣源高明の三男であり、俊賢の弟、高明薨去後兼家の庇護を受け、道長の猶子となった。また、源済政は道長室倫子の甥にあたる人物である。大納言時中の息男で、正暦五年蔵人修理亮を経て、長徳二年の当時は式部大丞在任である。

道長側近の経房、済政がだれも知らぬはずの居所を知っているということからすれば、清少納言が道長方の人であるとの噂が根も葉もない風聞にすぎなかったとは言いきれなくなってくる。また、清少納言が隠れ住む里邸を経房が親しく訪問することは、そうした推量に確かな根拠をあたえる情況証拠とも考えられる。そうした情況証拠からさらに推量をすすめて、この時期清少納言は道長方からの誘惑を受けていたとも見なされ、定子方を見捨て、道長方への転身を望んでいたのだとする見方さえある。

清少納言を疎外した噂が道長側近の男性官人との日ごろの親交にあるだろうことは容易に想像されるが、さらに道長方から誘惑の手が差し延べられ、清少納言が道長方への転身を望んでいたか否かは分からない。また中関白家の衰運のなかで清少納言が自らの去就についてどのような迷いのなかにあったかはっきりしない事である。しかし、定子周辺が最も深刻な不安感に包まれた時期に、定子のもとを離れて長期にわたって里にある事実はそうした推量を無下に退けることはできないのである。

仮に、道長方からの誘惑の手が延びていた事実はなかったとしても、また結果からすればそうした事実は否定されなければならないが、里居の期間に同僚の陰口が次第に尾鰭がついて、清少納言をして裏切り者ときめつけるような最悪の噂に成長したであろうことは十分に考えられるところである。

そしてそれは必ずや中宮の耳に達するところであり、中宮の憂慮がその点にあったとしても自然である。清少納言自身は噂する女房たちへの嫌悪とくやしさを表にたてるのみであるが、「宮の辺には、ただあなたがたにいひなして、そら事なども出でくべし」というのは、まさにそうした事態になっていたことを物語るものであろう。

三　山吹の花

里居の清少納言を訪ねた経房は小二条殿の寂寥の様や、女房たちの心配り、女房たちの清少納言に対する不満や期待などを述べて、中宮のもとへの帰参をうながす。経房の言葉を通して語られる女房たち、特に宰相の君のけなげな応答に小二条殿の寂寥のさまが際立つ。

清少納言の筆が事件そのものに対して極めて抑制されているのは、その背景が多言を要しない読者周知の史実だからであり、寂寥の様を常房の眼を通すことによってより際立たせることとともに意図的な技法と見てよい。

清少納言は、女房たちの期待や帰参を促す経房の言葉にも素直に従えない頑なな自分を語る。常房の言葉にも耳を傾けなかった頑なな強がりが中宮の手紙によって一気に崩れ、ほどなく再び出仕するにいたるわけである。中宮の深い思いやりが頑なな心を溶かし、翻意をうながしたことを語る構図である。人々の陰口と疎外感にどんな決着がついたものか触れようとしないのは、噂がもともと無視するに足る根拠のないものであって中宮と清少納言との強い絆はそれによって少しも損なわれることはないと語りたいからにほかならない。

こうした構図にもかかわらず、細部に様々な疑問が存在する。その第一は、中宮からひそかに届けられた手紙について語る部分である。

「例ならず仰せごとなどもなくて」こころぼそくもの思いに囚われていた日、「御前より、宰相の君して、しのびて給はせたり」という長女の口上でとどけられた手紙は、中に文字はなく「山吹の花びら」ただ一重あるのみであった。その花びらに「いはで思ふぞ」とばかり書かれてあった。中宮の真情はたちまちに清少納言の胸中を揺さぶり「いみじうひごろの絶間なげかれつる、みななぐさめてうれしきに」と感動させた。

中宮の機知に溢れた思いやりと、主従の心の通い合いの確かさを示す極めて印象深いエピソードである。清少納言の意図もまたそこにあるはずだが、「山吹の花びらただ一重」と「いはで思ふぞ」の古歌に託された中宮のサインは直ちに諒解しながら、返書をしたためようとして「このうたの本、さらにわすれたり」と、古歌の上の句がどうしても思い浮かばなかったと語るのはどういうわけであろうか。「心には下ゆく水のわきかへり」という上の句はほとんど意味のない喩にすぎないにしても、ど忘れして思い浮かべられなかったというのでは、中宮のサインを正しくうけとめられなかったことになりかねない。それを帰参の折り中宮にまで告白するのは、道化を越えた非礼とさえ考えられるところである。さらにまた、清少納言の道化た告白を契機に定子が話して聞かせる謎合わせのエピソードは清少納言のど忘れとは整合しない。戸惑いを示すような終結部に、これまで定子のサインに敏感に反応してきた清少納言にそぐわない歯切れの悪さがある。

そこには「数カ月の中宮との疎隔がもたらしたこだわりが重くのしかかっている」[7]と見られるが、清少納言のこだわりを解く前に、定子のサインについてあらためて検討をくわえて見る。

萩谷朴氏は、この山吹は季節からして「返り咲き」のものであり、

「清少納言に一日も早く返り咲け、即ち帰参せよとの意がこめられていたかも知れない」

と推察されたうえで、

「款冬の花自体に、中宮は、『古今集』俳諧歌・『古今六帖』巻五、素性の『款冬の花色衣主やたれ問へど答へず口なしにして』の古歌を踏まえた、何の仰せ言も料紙には書かぬ『口なし』の態度を説明し、そこから花びらに書きつけた『古今六帖』巻五の『心には下ゆく水のわきかへり言はで思ふぞ言ふにまされる』という引き歌を暗示されたのであろう。」

とし、引き歌には「口にはださずそなたを恋しく思っているのがどんなに辛いかおわかりかえ」という中宮の心情が託されていると解された[8]。

諸注「山吹の花びら」は素性の古歌にあるように「山吹」に「梔子－口無し」を含ませたものと解し、「いはで思ふぞ」は、「心には下ゆく水のわきかへり言はで思ふぞ言ふにまされる（古今六帖）」の第四句をひいたものであるとするのが一般である。

しかし、これには異論もある。これより早く、池田亀鑑氏は、

わが宿の八重山吹は一重だに散り残らなむ春のかたみに（拾遺集一春　読み人知らず・和漢朗詠集）

を引き、

「時節と共に散り行く花にも似て、権勢に走る浮薄な人の心に直面された中宮は、清少納言の実意を信じかつそれを希望し給うて、折から季節の外に超然として咲き残っている山吹の一輪をば、清少納言の許に賜ったものと解したい。[9]」と評された。

渡辺実氏もまた、「わが宿の」の歌を引き、

「今は秋らしいが『春のかたみ』なら支障はないし、父関白生前への思いは『春のかたみ』の語にふさわしい上、何より『ただ一重』の意味が生きる。更に後の『言はで思ふぞ』と重ねれば、いま残っている女房より、離れているそなたにこそ残ってほしい、という意でもあり得る。だとすれば、『人づての仰せ書き』でなかったのも『忍びて給はせ』たのも当然である」[10]

と解釈された。

また、大島秀雄氏は、古今六帖の素性歌が踏まえられているとしながらも、

「山吹が梔色であるところから、『口無』の洒落と解して定子が用いたとされているが、実はそうではない。定子は清少納言に『主やたれ』と問うているのである」[11]

との解を示された。大島氏は定子が既に噂が真実であることを見抜いており、「山吹の花びら」は道長方に傾こうとする清少納言に帰るべき場所はひとつしかあり得ないと叛意をうながすものであるとする。また引き歌は「わきかへりいはで思ふぞ」とある部分に定子の心情があり、「『わきかへり』とは、切なる愛情と噂を真実と考えた場合の定子の怒りが籠っていると見られる」と解する。

以上みてきたように、「山吹の花びら」が意味するものも理解に小異があり、「いはで思ふぞ」との組合せの解もまた定子の心情を伝えるものとして解されながらも、噂を否定する寛容を見てとろうとするものと、背信に傾こうとする清少納言の心を見抜いた定子の怒りをさえ読み取り得るとするものに分かれて、かなりの振幅がある。

清少納言は「いみじうひごろの絶間なげかれつる、みななぐさめてうれしきに」と感動の様を伝えるのみで、「山吹の花びらただ一重」と「いはで思ふぞ」を組み合わせたサインをどう理解したか改めて語ろうとはしない。駄洒落や機知を解説するほど間の抜けた話はない。当事者を包む世界の共通の知識や教養の範囲で意味をもつ駄洒落や機知が、その世界の外の者には理解出来ない場合は当然起こるが、これは当時の生活の中では紛れることのない、ことさら説明を要しない意味だったに違いない。

「山吹の花びらただ一重」が秋の季節にそぐわない点が第一の疑問であるが、季節はずれにもかかわらずあえて山吹が選ばれるのは、中宮の意図するものが山吹でなければ伝えられないものだったからであろう。その意味では「返り咲き」も捨て難いが、秋の山吹はそれほどめずらしいものではない。和泉式部集に

やまぶきあやしう咲きたるところなり

かはづ鳴く井手にならへる山吹の虫の声する秋もさきけり（八二〇）[12]

という歌があり、所によっては季節はずれの山吹を目にすることも多かったであろう。その意味では特に「返り咲き」に重い意味を与えなくともいいであろう。

また、「我が宿の八重山吹は一重だに散りのこらなん春のかたみに」はこの時期の中宮の心境を言い当てているようにもみえるが、職場を離脱した女房に示す心弱さがそぐわない。さらに、清少納言が山吹の花びらからただちにこの歌を想起するほど、人口に膾炙した歌であるか否か疑問がある。

この「読み人知らず」の歌は『拾遺集』春下所収歌であるが、『拾遺抄』にも入集している。『拾遺集』の成立は寛弘二年以降と目されるが、公任撰の

『拾遺抄』がそれに先行して成ったとする通説に従うにしても拾遺抄は長徳二、三年頃の成立と目される。この歌がそれ以前に広く知られていたとも考えにくい。また、この歌は同じく公任撰の『和漢朗詠集』には平兼盛歌として収載されているが『兼盛集』には無い。『和漢朗詠集』もその成立は寛弘七、八年であってみれば、清少納言がこの時期容易に想起し得る歌とは思えない。

和歌詠作の場で見れば、山吹の花は、「口無し」「いはぬ」の縁語として用いられる例が圧倒的に多い。

『拾遺集』には「わが宿の八重山吹」の歌に並んで、清少納言の父元輔の山吹の歌がある。屏風歌であるが、

物もいはでながめてぞふる山吹の花に心ぞうつろひぬらむ（七〇）

である。この歌も『古今集』歌を踏まえて「山吹の梔色に染まって私も口無しになってしまったのか」という詠嘆を言外にふくむ歌である。

『斎宮女御集』冒頭には村上天皇第三皇女保子内親王と、妹の四の宮（母斎宮女御）との姉妹の間に交わされた贈答一対がある。おそらくは山吹の一枝につけた贈歌であったものかと推測されるが、

ちかきほどにわたらせたまひて、おとづれきこえさせたまはねば、女三宮より

へだてけるけしきをみれば山吹の花ごころともいひつべきかな

御返、女御殿の四の宮

いはぬまをつつみしほどにくちなしのいろにやみえし山吹の花（二）（『後拾遺集』一〇九三にも）

近くにおいでになるのに音沙汰ないのは山吹の花のように口なしのまま、ほかに心を移して（花ごころ）隔てを置いているからでしょうとの抗議に、あなたがなにも言わない間は近くに居ることをつつみ隠して居たのに「くちなし」色とはっきり見えたのですねと応ずる。山吹の花が「くちなし」を意味するとの了解のもとに交わされた例である。

また、『実方集』には、円融院との即興のやりとりだが、

九重にあらで八重咲く山吹のいはぬ色をばしる人もなし

また御かへり

衛士が居しひたきに見ゆる花なれば心のうちにいはでおもふかも（十二）

『和泉式部集』にも、

春ころ、久しく音せぬ人の、山吹に日ごろの罪はゆるせ、といひたるに

とへとしも思はぬ八重の山吹をゆるすといはばをりにこんとや（一五八）

とある。多少時代を前後させてその範囲を広げてみれば、古今集歌をもとに山吹の花に「くちなし」「いはぬ色」を含ませた歌は珍しくない。

かはず鳴きなけば咲きぬる山吹のくちなし色にいかでみゆらん（『道信集』　六八）

口なしの色とぞ見ゆるみちのくのいはでのをかの山吹の花（『夫木抄』六　前大納言匡房卿）

音もせで谷がくれなる山吹はただくちなしの色にぞありける（『夫木抄』重之）

山吹のくちなし色にとぢられていひだすかたも見えぬ池水（『清輔集』五七）
散らすなよ井手のしがらみせきかへしいはぬ色なる山吹の花（『拾遺愚草』四一九）
ことに出でていはぬ色とや水無瀬川かはらじ春の山吹の花（『夫木抄』順徳院）
山吹の花こそいはぬ色ならめもとのまがきをとふ人もがな（『続千載』為家）

こうした用例から見て、山吹が「くちなし」「いはぬ色」を意味するのが一般であり、贈答の場では無音を責め、あるいは弁解する道具だてとして用いられていることが注意される。中宮もまた山吹のはなびらに「くちなし」を意味させたと考えるのが妥当であろう。

応和三年（九六三）に催された「宰相中将君達春秋歌合」[13]は、山吹の花が「くちなし」であるがゆえにもの言わず、「言はで思ふ」と連想されて行く様をよく物語っている。

あきの御方

22　ともかくもなにかこたへむきりぎりすいはでおもふをまさるかたにて

春

23　くちなしのいろにほへるをみなへしいはで思ふはおとるとぞきく

あき

24　山ぶきのくちなしいろにかよひつついはねどしるし春はまけぬと

春

25　いろばかりあきのはなにはかよへどもやへ山ぶきのかずはまされり

宰相中将は一条摂政藤原伊尹のことである。その君達、親賢、惟賢、挙賢、義孝、義懐らが、母恵子女王と叔母麗景殿女御らとともに贈答歌のかたちで春秋論議をおこなったものである。定子後宮においてこの催しと歌が共通の話題になっていたか否かは措いても、この時代「山吹」と「いはで思ふ」との和歌における機知的な結び付きが確かめられるのである。

四　いはで思ふぞ

「山吹の花びらただ一重」が「くちなし」を意味するとして、花びらに書かれた「いはで思ふぞ」と組み合わされた場合どのようなサインとなるのであろうか。

萩谷氏のいうように料紙に何も書かぬ中宮自身の態度を口無しとして、「いはで思ふぞ」とともに、「口にださぬが、言葉にするよりいっそう深く思っている」と変わらぬ親愛の情を伝えたものなのであろうか。そうであれば、清少納言ならずとも感激を禁じ得ない、中宮の深い思いやりである。「いみじうひごろの絶間なげかれつる、みななぐさめてうれしきに」という清少納言の感激と、長女の「御前には、いかが、もののをりごとにおぼしいできこ

えさせ給なる物を」のせりふとが相俟って、この手紙が清少納言への変わらぬ親愛の情を伝えたものとして読むべきことを要求する。

しかし、いかに中傷に耐え兼ねたとはいえ、宮仕えを放棄し里居に拗ねている一女房にたいする中宮の音信としては破格の待遇である。寂寥の日々の中宮のこころ弱さが垣間見られるとしても、なお疑問を禁じえない。そのうえ再び出仕した時、中宮自身が人々の前でこの手紙を話題にし、さらに清少納言が「いはで思ふぞ」の上の句を度忘れしたと語ることはいっそう疑問をつのらせる。

中宮の手紙は里居の清少納言のもとに「ここにてさへひきしのぶるも、あまりなり」というほど人目を忍んでこっそりと賜らせたものであった。その手紙の真意が上記のような意味であったとしたら、人々の手前披露することは憚かられてしかるべきであろう。里居の清少納言に対する殊さらな恩寵は人々の感情を悪化させかねない。そのうえ中宮の愛情といたわりに満ちたその歌の上の句を、清少納言が失念して思い出せなかったというのではあまりに非礼にあたるであろう。

事実は中宮自身「にくき歌なれど、このをりは言ひつべかりけりとなん思ふを」と人々の前で話題にし、度忘れしたと語る清少納言の非礼も咎められることは無い。それどころか清少納言の古歌失念から謎合わせの逸話を話して聞かせる中宮のご機嫌は上々である。してみれば上記の山吹の花びらと「いはで思ふぞ」に託した趣向は人々の前で披露されてもさしつかえないものであったと考えざるを得ない。すくなくともそこには清少納言を感激せしめながら、人々の感情を悪化させずに受け止められる意味が表立てられているはずである。

ところで、平家物語巻五「富士川」に薩摩守忠度の逸話がある。さる宮腹の女房の許に通っていたが、ある夜女性の先客があっていつまでもまたされた。忠度が扇を荒く使って合図すると、女房は「野もせにすだく虫の音よ」と口ずさんだので、忠度は扇を使うのをやめて帰って行った。あとで女房が訳を問うと、「かしがましと言われたので」と答えた。「かしがまし野もせにすだく虫の音にわれだにものは言はでこそ思へ」の古歌によるからであるが、女房は「われだにものを」という気持ちだったのだという。

引き歌が送り手と受け手でその意味がずれていたり、故意にずらして受け取ったりすることは、この例によるまでもなくありうる事である。中宮が伝えるべき真意を清少納言が異なる意味として受け止め、あるいは故意にずらしてうけとめたということも考えられるのである。

清少納言の立場からすればこのたびの里居は「例ならず仰せごとなどもなくて日比になれば」とあるように、中宮からの音信の待たれる日々であったことは事実である。音沙汰なくすぎた中宮が久々の便りに「くちなし」のようだったがと言いわけしたとも考えられないわけではない。

しかし、『まゐれ』などたびたびある仰せごとをも過ぐして」頑なに「くちなし」の態度を通して来たのは清少納言の方である。中宮のご機嫌を損じたとしても不思議はないほどであった。そのうえ清少納言を「あなたがた」に言いなす女房たちの陰口が信憑性をもつ客観的状況や、最悪の噂が当然中宮の耳にも達していたであろうことは先述のごとくである。清少納言の里居がそうした噂への無言の抵抗であることを理解していたにしても、里居の期間が異常に長期に及んだことは、中宮の信頼にも疑心の影を落とさなかったとは言い切れない。清少納言が再び出仕して「かはりたる御けしきもなし」と安堵するのは、その裏に変わりたる御けしきを恐れる危惧がずっと存在したことを物語る。

そう考えてくると、斎宮女御集の例に見るように、「山吹の花」はそれとなく無音を咎める贈答の場面で用いられていることが注意される。山吹の花びらに託した中宮の真意は、頑なに自分を閉ざして口をつぐむ清少納言をそれとなく咎める意味を含ませたものだったのではなかろうか。「おまえは口

無しか」と揶揄と非難を含んだ問い掛けは文字にするよりもやわらかく、かえって心に響くものであり、清少納言の反省をうながすものだったであろう。

「いはで思ふぞ」の古歌を、清少納言自身が枕草子七一段「懸想人にて来たるは」に引いていることもよく知られている。そこでは長居して帰りそうもない主の供人が溜息つくのを「『下行く水の』、といとほし」という「はっきり言葉にだせぬだけに不満は強いだろう」という引き方である。

恋の歌をそのまま恋の意味に用いるのでは気が利かないであろうから、「いはで思ふぞ」もまた清少納言が心に抱く忿懣をそれとなく言い当てて見せたものと考えた方が適切であろう。「お前は口無しか」と問い掛けたその花びらに「いはで思ふぞ」と記すのは、「おまえは口無しなのか。頑なにくちなしを決め込んでいても、『下行く水』のように沸き返っているであろうお前の気持ちは言葉にするよりいっそう深いのだとわたしには良く分かっているのだよ（いつまでも拗ねていないで出仕せよ）」といったものであろう。こう解する方が日ごろの中宮の機知と威厳を損なうものではない。「にくき歌なれど、このをりはひつべかりけりとなむおもふ」と中宮の感想が漏らされるのは、清少納言が狙いどおり出仕した満足とともに、この歌によって清少納言の心中の忿懣をたしなめ得たからに外ならない。

中宮が清少納言の「心には下行く水のわきかへり」口に出さないでいる気持ちと言ったのは、陰口に対する清少納言の忿懣をさすものであろうが、清少納言にはこの日ごろ心にひろがりつつある去就に迷う気持ちも鋭く見通された想いがしたことであろう。取るものもとりあえず直ちに参上したというのでもない反応の鈍さはその後ろめたさに原因があるのであろう。そう考えて来ると、清少納言がこの古歌の上の句を度忘れして思い出せなかったと語る非礼さも、まったく違った意味をもってくる。

つまり、清少納言が上の句を度忘れして思い出せなかったと語るのは、中宮が指摘する忿懣を否定するサインなのである。心中に「下行く水の（ごとく）わきかえ」っているであろうと衝かれた忿懣や、去就に迷った後ろめたさは決して持っていないのだ。だからこそ、「心には下行く水の」という上の句が思い浮かばなかったのだ。少しでもそうした心があれば当然浮かぶはずの古歌なのにと。

道化を装う度忘れという形で忿懣のないことを示すことによって、清少納言を疎外した女房たちとの和解もさりげなく成り立つ訳である。上の句を度忘れしたと自ら告白するのは、忿懣を否定し、陰口を水に流し、和解をもとめるサインであった。そのサインを無言のうちに了解することによって、中宮を中心とする女房集団は均衡を保ち、結果として中宮の御前には「言はで思ふぞ言ふにまされる」という思いやり深い慈愛の心ばかりをうけとめ、その心に感激して再び出仕した女房がいるのである。

五　謎合わせの挿話

では、清少納言の告白を機に「謎合わせ」の挿話を語る中宮の真意はどこにあるのだろうか。また、この挿話をもってこの段を構成する清少納言の意図は何であろうか。

清少納言の「いはで思ふぞ」の古歌の上の句がどうしても思い出せなかったという告白に対し、中宮は「さることぞある。あまりあなづるふる言などは、さもありぬべし」と理解を示したが、それをきっかけに謎合わせの挿話を話して聞かせる。

それは、謎合わせの一番の出題はわたしに任せておきなさいと、胸を張って請け負った女房が、当日敵味方皆が固唾を呑んで見守る中、もったいぶった態度で「天に張り弓」という、ばかばかしいほど簡単な問題をだした。味方の失望と敵方のあざけりにその場も白けるほどであったが、敵方一番の人は馬鹿にしきって、「やや、さらにえしらず」とふざけて答えた。その途端、件の人が勝ち点を入れさせた。敵方はこんな謎を知らぬ者がどこにあろう。点を入れるのは納得いかないと抗議したが、「知らないといったからには、どうして負けでないことがあろうか」と、言い張って、二番以後の勝負もこの人が総て勝ちに導いたという話である。

話題の女房がいつ誰のこととともわからない、寓話性のつよい話である。「いみじく人のしりたることなれども、おぼえぬ時は、しかこそはあれ」との中宮の述懐にもかかわらず、清少納言の度忘れを慰める例話と受け止めるには違和感がある。

清少納言が忘れた『心には下行く水の』の一首が、誰しも知っている有名な歌であると言う点と『天に張り弓』という謎が、極めてありふれた謎で、その答えが『弓張り月』であるということは誰しもが知っているという点では、清少納言の度忘れと中宮の話とに一致点がある。しかし、右方一番の人が、わざと判らないふりのわるふざけをして失敗したという中宮の話の肝腎の点が、清少納言の失態とは異なるのである。

この段の末尾には、

「これは忘れたることかは、ただみな知りたることとかや」（三巻本）

と、中宮が語るエピソードに対し、清少納言自身がその真意を測りかねるような、結語が付されている。能因本でも「これは忘れたることかは、みな人知りたることにや」と小異は認められるが、中宮の真意をいぶかしむ口吻は変わらない。

この短い結語の解釈は、「此のなぞは、清少のごとく、忘れたるにはあらで、皆知りて、能くしらずといひしに、われはかく、わらはも知たるうたを、忘れたる事と也」という『春曙抄』の注釈以来、「この『天に張り弓』のことは、わたしのように胴忘れして失敗した例だろうか、そうではない。ただ、みなが知っていて油断したための、失敗なのだが……。」[14]として、中宮が作者の失敗を取りなしてくれたが、やはりほんとうはちがっていて自分の方はひどい失敗だったのだ、と中宮のとりなしとその思いやりに感謝する「謙遜の結語」[15]と解するのが一般である。

しかし、この結語には萩谷氏の高説があり、「ただ、みな知りたる言（なるに）と（の仰せ）かや。の括弧内を省略した構文なのである」として「このお話は、（どうして）忘れたことなものですか。ともかく、誰でも知っている文句なのにという（中宮様の）お気持ちなんでしょうね。」[16]と口語訳されている。

「謙遜の結語」ではあるものの、「誰でも知っている文句なのに」というところに、中宮の批判的な態度を認め、それを受け止めた、清少納言の恐縮の体と解するのがよいであろう。

この挿話を「定子の寓話」として立論された大島秀男氏は、中宮の批判をより強いものとして受け止めている。即ち中宮は清少納言の古歌失念の告白を猿楽言ととらえ、謎合わせの話は清少納言の言動を揶揄するために語り聞かせた「猿楽言」であるという興味ある見解を披瀝されている。

氏は清少納言の古歌失念は、「これは、道長方から云々の話を朧化してしまおうとする、彼女のポーズ」であり、「清少納言の真意は、道長方からの誘惑を受けていたことを懸命に隠そうとしていた点にあった。」といわれる。

「ただ皆知りたることとかや」について、

ただ「天に張り弓」の謎も、「下ゆく水」の古歌もいずれも人々がよく知っていることだと言うことである。右の一が「天に張り弓」の問にわからないと答えたことは、誰でも知っていることであり、猿楽言には猿楽言を以てしたのである。左の一には、右の一の答え方が猿楽言であるとわかっている。自分が「いはで思ふぞ」の古歌が思い出せなかったと言ったけれども、中宮様には、それは自分が道長方からの誘惑を受けていることを隠そうとしているのであると見抜かれてしまっているのである。中宮様は、自分のようなものがどんなに取繕ってみてもすばやく見抜かれ、優しく諭されるのである。(17)

という解釈である。これは、清少納言の長期の里居の理由を道長方からの誘惑をうけ、自らの去就に迷っていたためと見て、経房来訪も「定子からと道長からとの、二つの相反した使命を帯びていた」のであり、彼女の心には、「定子への慕情と、道長方への憧憬と、そして口さがない女房達への嫌悪感とが交錯していたと思われる」という推理を前提にした立論である。

しかし、咄嗟の作り話のようにも見える寓話性の強い中宮の挿話に、素直に耳傾けるならば、知っていながら悪ふざけして負けになった右方の女房よりも、「天に張り弓」の出題によって味方を勝ちに導いた左方の女房の機転の方が印象に強い。すくなくとも話題の中心はこの女房の行為にあり、一座の反応も「こなたの人のここち、うちききはじめけむ、いかがにくかりけむ」と、この女房の意表を衝いたかけひきを中心に感心しているのも当然である。中宮の挿話を素直に聞けば、一旦味方を裏切ったように見えて実は味方を勝利に導いた女房の駆引きとして受け止められたはずである。自信たっぷりな態度や意表を衝いた出題で強引に勝ちに導く女房の態度は、どことなく清少納言を彷彿させるものがある。

上村忠昌氏が大島氏説を批判し「仮にこの『謎謎合わせ』の話の中に中宮の寓話を考えるとすれば、それは、清少納言を『左の一番』に配して、道長側に当たる右方に内通したかと疑われたのも結局は誤解であったと言いたい一点においてであろう。」(18)とされたことが大きなヒントを与える。

清少納言を「あなたがた」の人なりとする女房間の噂は、すでに中宮の知るところであり、聡明な中宮は清少納言の里居が尋常な理由によるものでないことはすでに知っていた。道長方からの誘惑があったか否かは即断できないが、すでに女房間の噂はそれを示唆するまでに尾鰭がついてしまっているのである。

事件直後の動揺が鎮まるにつれて、そうした事態も幾分かは沈静化し、その時期を測っての清少納言の出仕であったと考えるが、再出仕した清少納言が自ら道化を表にたてながら古歌失念を語るのは、下心はなかったと訴える、同僚女房との和解を求めるサインに外ならなかった。

中宮もまた、互いに傷付けあうことなく女房同士を穏便に和解させることが、最も苦心を要した所であろう。清少納言のサインを素早く察知し、謎合わせのエピソードは、裏切り者か否かを軽々しく決め付けることの愚かさをそれとなく戒めた苦心の創作であったのではなかろうか。

清少納言にはその真意が痛いほど分かっていたはずである。しかし、中宮の真意をあからさまにするには、裏切り者になりかかった自分と、対立し分裂した中宮方の無残な実情を曝さなければならない。清少納言の自尊心は到底それを許さないであろう。そのため古歌の度忘れと結び付けることによって、中宮の真意があたかもそこにあったかのように語り、そう語ることによってすべてが無傷なままで、中宮の博識と寛容をきわだたせる、これが清少納言の意図であったに違いない。

清少納言の古歌失念と中宮が語る挿話とがぴったり一致しないのは、それぞれに独立し関連性がなかったうえに、もともと異なる意味で語られた中宮の挿話を強引に結び付けた清少納言の意図に原因があったと考えられる。古歌失念を語る不自然さは案外、中宮の挿話を生かすための手の込んだ創作である可能性が高い。古歌失念の話を除外してみれば、中宮の挿話は裏切り者として白眼視された清少納言をそれとなく庇う中宮の寛容と思いやりを物語るエピソードとして素直に理解できるのである。

結語の曖昧な表現は、萩谷氏のいう中宮の仰せの部分『　』の範囲をさらに広げて「これは『わすれたることかは、ただみな知りたること（なるに）』と（の中宮の仰せ）かや」と解する。こう理解することによって、それとなく自分を庇い、和解をうながす中宮の真意に恐縮しながら、深い感謝を胸のうちに畳んだ清少納言の表現と解し得るのである。

七　結　び

以上考察して来たように、山吹の花びらに託した中宮の真意が、噂の渦中でくちなしを決め込んだ清少納言の傲慢をたしなめる思いやりにあり、謎合わせの挿話がそれとなく和解に腐心する中宮の苦心の機知であるととらえた。

謎合わせの勝負が左の一番の強引な駆引きによって敗北した事を挿話の中心に見て、清少納言の執筆意図は「謎合わせにおける右方の敗北同様に中関白家の敗北も理不尽なものであり、その原因は中関白家自身のとった一連の行動というよりもむしろそうした結果になっただけであり、本来なら中関白家が敗北するはずはなかったと意味づけてゆく部分として、この謎合わせの話は位置づけることができる」[19]という意見もある。

しかし、そうだとすればこの中宮の挿話そのものが清少納言の創作と見なければならなくなる。はたしてそうであろうか、中宮が実際に語ったものという前提で見るならば、そこには中宮の苦心の機知が読み取れるのである。噂の渦中に苦悩した清少納言には忘れ得ぬ中宮の深い思いやりであったろう。凋落を余儀なくされた政変の渦中にあって、女房達の動揺と分裂は中宮の悲嘆をいっそうかきたてるものであったはずである。それをありのままに素直に記すには、清少納言には深くためらわれるものがあった。中宮亡き今となっては、忘れてしまいたい中宮方の動揺と疑心暗鬼による分裂であった。

山吹の花びらの手紙、古歌失念の失敗、謎合わせの挿話を、一連の時間的にも意味的にも連環するものとして再構成する構想に、清少納言のそのためらいが強く働き、事実ありのままの記録から逸脱する結果になった。いわば事実ありのままの記録から主題性によって再構成された説話的世界に一歩踏み込ませることになった。

この章段を事実ありのままの記録として理解しようとすると、曖昧な点が多く残る。しかし、曖昧さに拘泥しない自由な構成意図が、逆境に機知を愛し毅然たる態度を崩さぬ中宮の姿に焦点を結ばせる結果となっている。それが愚かな迷いに苦しんだ自分を救う唯一の手だてであったとしても、手法的自覚にいたる自然な道であったと考えられる。

道隆薨去の後、日ならずして凋落を余儀なくされた中関白家の不幸が、定子主従と清少納言にあたえた打撃ははかりしれないものがある。しかし、「長徳の変」による伊周・隆家の左遷配流に対する悲嘆、怨嗟は勿論、中宮が小二条殿、職御曹子、三条の宮と住まいを転々とされた日々に、確かに存

在したにちがいない中宮周辺の寂寥と憂愁すらも、枕草子の叙述の表面には全く描かれないものであることは良く知られた事実である。

その事実に左大臣道長の権勢に対峙する清少納言の意思を見て、皇后定子に捧げた純情を読み取る立場や、明るさのみを描き暗さを書かなかった清少納言の中に、矛盾する人生の一面の認識しかない宮廷賛美者としての資質の限界を見る立場、さらには、道長批判を周到に消し去っているのは、道長の権勢を無視したからではなく、左大臣家に対する遠慮からであり、枕草子そのものが左大臣家に対して自己の才能をアピールする申し文であると見る立場があり、清少納言の意図をめぐる理解には大きな振幅がある。

その実態はなお不明であるにしても、書くことによって不幸な現実を乗り越えようとした清少納言の意志はあきらかである。この段は動揺と分裂の様を叙述の外に押しやりながら、悲惨な現実に抗して中宮賛美の新たな手法を開拓した章段であると位置付けることができる。

注1　三田村雅子「枕草子の『問』と『答』日記的章段の論理をめぐって」『国語と国文学』昭和62年11月。

注2　枕草子一三六段「殿などのおはしまさでのち」。本文引用は「新日本古典文学大系『枕草子』」による。ただし、仮名遣いは本文に傍記された歴史的仮名遣いを採った。

注3　長徳二年正月十六日、伊周、隆家の従者花山院を射奉ることに端を発し、四月二十四日、伊周・隆家・信順・道順左遷。明利・頼親・周頼・方理除名などの処分が決した。二条北宮に潜伏した伊周・隆家は追捕され、五月一日、伊周を播磨に隆家を但馬に領送するに至る政変をいう。

注4　「小二条、東三条之東町、今鴨院也。世称二条宮。長徳二年六月九日中宮御所焼亡。渡御明順宅。冷泉北町尻西。」三巻本「枕草子」勘物。

注5　萩谷朴氏『枕草子解環』三　同朋舎　一九八二。

注6　高橋和夫氏「枕草子回想章段の事実への復原　その二　清涼殿の丑寅の隅・草の庵」群馬大教育学部紀要（人文社会科学篇）41　平成4年3月。

注7　前掲注1に同じ。

注8　前掲注5に同じ。

注9　池田亀鑑氏「枕草子百二十六段の年時とその精神」『中古文学叢考』昭和18・5。至文堂版『研究枕草子』昭和38所収。

注10　渡辺実氏校柱『枕草子』「新日本古典文学大系」

注11　大島秀男氏「定子の寓話―枕草子一三八段をめぐって」『平安朝文学研究』第二巻　第三号　昭和42年4月。日本文学研究資料叢書『枕草子』有精堂　所収。

注12　『新編国歌大観』第三巻　私家集編1による。鷲山茂雄氏「秋の牡丹・秋の山吹―『枕草子』「殿などのおはしまさで後」の段の史実的年時考証再考」（『立正大学国語国文』24　昭和63・3）に秋の山吹についての考察がある。

注13　『新編国歌大観』第五巻　歌合編による。

注14　池田亀鑑氏『枕草子全講』至文堂　昭和48年。

注15　金子元臣氏『枕草子評釈』明治書院　大正10年。

注16　前掲注5に同じ。

注17　前掲注11に同じ。

注18　上村忠昌氏「『枕草子』第一四三段における『謎々合せ』の考察」（昭和62・11）稲賀敬二編著『源氏物語の内と外』風間書房　所収。

注19　小森潔氏「枕草子『殿などのおはしまさで後』の段を読む」立教高等学校研究紀要　18集　昭和62・12。